

## 第 5 講：11 「神が引き寄せた」

今回取り上げる逸話篇は文久 4 年（1864）に山中忠七氏の妻そのの身上の患いによっておぢばに引き寄せられ、その際に教祖から頂かれたお言葉である。この逸話から何を学ぶのか、下記の言葉を取り上げ思案したい。

## 1. 身上・事情は道の花

一般的に入信のキッカケの多くは身上の患いが多い。当時の人々の入信の様子を知る手掛かりとして、『御神前名記帳』というのがある。慶応 3 年（1867）4 月 5 日～5 月 10 日までのお屋敷に帰った参拝者の記録である。36 日間で延べ 2,175 名が参拝した記録が残っている。祈願内容を見ると、「さん八（妊娠 8 カ月）」「半さん（流産）」などお産に関するものが 200 名以上で、最も多い祈願である。それ以外では、「眼、腹、頭、足、皮膚、咽喉、婦人病、胸、肩、癩、疔」となっている。この他に、お守り、家内安全等もある。『御神前名記帳』を見る限り、大半が「病」の平癒祈願である。これは医学が進歩した現代であっても変わりはなく、「病」は入信の上で重要なきっかけとなる。

「人は皆、苦しみを厭い、楽しみを求め、悩みを避け、喜びを望む。親神が、陽気ぐらしをさせたいとの思召で、人間世界を造られたからである。」と『天理教教典』（57 頁）に記される所以である。

しかし、重要なことは、天理教の教えは決して否定的な捉え方ではなく「身上のさわりも事情のもつれも、ただ道の花」（『天理教教典』85 頁）なのである。

加えていえば、身上の患いをはじめ、不時災難、事情の悩み等はすべて陽気ぐらしへの道筋としての親神のてびきなのである。それを心に治め、日々通るところに自らの心の成人の道がある。

## 2. 深いいんねん

「いんねん」という言葉は天理教ではひらがなで表記し、さまざまな場面で使われている。「我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり。…」(『天理教教典』3 頁)があり、また、立教の三いんねんである「教祖魂のいんねん、やしきのいんねん、旬刻限の理」(32 頁)などがある。このほかにも一般的な信仰問答のなかに「いんねんが悪い」などという言葉を目にする事も少なくない。人々はさまざまな場面でこのいんねんという言葉を目にし、使っている。広辞苑に記される「因縁」の意味は、「①物事の生ずる原因。②きっかけ、動機。③由来。④ゆかり、関係、縁。」となっている。逸話篇での「深いいんねん…」という言葉は、上記に記す一般的な意味をあてはめ、解釈することも可能である。

しかし、天理教が説く「いんねん」の意味は、ややもすれば否定的に考えてしまいがちな、また負の側面として捉えてしまうような様々な事象には「陽気ぐらし」をさせてやりたいという親神の親心がそこに込められているのである。ただ単に、因果律、縁で捉えるのではなく、陽気ぐらしをさせてやりたいという思い、守護するという絶対的な親神の思いである「元のいんねん」に帰結するという考え方が重要なのである。故に、陽気ぐらしに向かう日々の心遣いの重要性を一人ひとりに説いているのである。

## 3. 神の御用を聞かんらんで

「おふでさぎ」に、「いかなるのやまいとゆうてないけれど

みにさわりつく神のよふむき、「よふむきもなにの事やら一寸しれん 神のをもわくやまへ」の事」（四 25・26）とあるが、親神の教えを知り、その教えを自分自身でいかに咀嚼し、実践するのは信仰者として重要な部分である。身上の患い、事情の悩みをきっかけとする信仰生活で重要なことは、その親神の教えを心に納め、教祖のひながたを手本として日々実践することにある。その具体的な信仰者の心のありようについて簡潔に示したものが 2 代真柱が教示した「ようぼくの三信条」である。それは、「神一条の精神、ひのきしんの態度、一手一つの和」をいう。

「神一条の精神」とは、自分の心をすべて親神の思し召しに照らし合わせて、物事を判断し、行動することを意味する。自分自身の得手、勝手な部分、人間の都合のよい部分で解釈することではない。自ら神を求め、どこまでも親神の思いをよりどころにして、日々実践するところに意義がある。

「ひのきしんの態度」については、『天理教教典』のなかで「日々常々、何事につけ、親神の恵を切に身に感じる時、感謝の喜びは、自らその態度や行為にあらわれる。これを、ひのきしんと教えられる」（76 頁）と示されている。身上の患い、事情の悩みを救って頂き、病で、事情で苦しんだ日を思い返すとき、今日の日が感謝せずにいられないという神恩報謝の態度をいうのである。その感動、感謝の心から行うひのきしんには陽気ぐらしの実現に妨げとなる悪しき欲もなく、ただ感謝と喜びでいっぱいという心しかない。この態度、実践が信仰者としての目指すところなのである。

「一手一つの和」とは、親神の思し召しにそれぞれが心を合わせることを意味する。『天理教教典』では、「一手一つの心に、自由の守護が頂ける。いかに多くのものが相集つても、一手一つの理を欠くならば、親神に受け取つて頂けない。人皆、相互に一つの道の理に心を合せ、互立で合い扶け合うてこそ、陽気に勇んで生活して行ける」（94 頁）と記されている。要するに、親神の教えを「芯」として皆が通るところに親神が守護されるのである。

この三信条が信仰者にとって重要な指針であり、とりもなおさず、信仰者の目指すべき境地なのである。

しかし一方では、信仰者として教えに基づき日々の生活を送るものの、知らず知らずのうちに現代社会の物差しで、今の時代の考え方で信仰を推しはかることがあるのではないだろうか。資本主義社会、経済成長を優先とするわが国の社会背景のなかで、競争主義の原理が存在する。「より強く、より速く、より高く」といった考え方、価値観に基づき、無意識のうちに効果的に効率よく、即効性を追い求めてしまうきらいが、信仰生活のなかにあるのかも知れない。故に、ご守護のありようも「平均、標準」を目標にし、あたかもそれが親神の守護と錯覚してしまうことが無きにしても非ずである。見える部分に心を奪われ、その部分のみでご守護を推しはかってしまうこともあるのではないか。

「信仰とは何か」、「ご守護とは何か」をあらためて自分自身の心に問う次第である。重要な教えを自らが心に治め、信仰者としていかに実践するのか、また日々、親神のたいなるご守護に抱かれた人間であることをこの逸話を通して再覚知している。